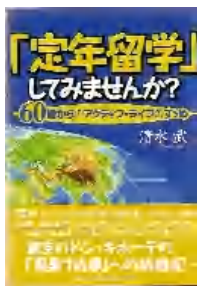


## さらに大きな夢を抱いて！

この3月、私もいよいよ「後期高齢者」と呼ばれる年代に入りました。振り返れば「古希」からの5年間はまさに瞬時でした。“これはいけない。うかうかしていたらアッという間に一生も終わってしまう”——そこで75歳の誕生日を機に、残された人生の設計を確認したところです。

いっぱい目標を掲げました。さらに大きな夢を抱いて！なぜならこのように書くことによって、外に向かって発表することによって、自分の心もより深く固まるからです。夢は持たなければ損。仮に夢が実現できなくても、そのことを考えているだけで楽しくなるからです。身体の老化はやむを得ないにしても、心まで枯れてしまっただけではいけない。夢を描くのは子供、青年だけでなくシニアこそ必要なのです。



私はスペイン留学から帰国して出版した『定年留学』してみませんか？——60歳からのアクティブライフのすゝめ——のあとがきに綴りました。

「大学を終わると、いよいよドン・キホーテの軌跡を訪ねての旅に出かけます。その後は、少し働いてお金を貯めたら、世界の名作の舞台を訪ね歩く予定です。“東京のドン・キホーテ”の見果てぬ夢は続いていきます」と。

ところがその直後、予期もしなかったうつを患い、生死をさまようほどのどん底にありました。それを医学と信仰の力と妻の支えで乗り越えることができた。今思えば奇跡のような体験です。

そこからまた私の挑戦が始まりました。予定していた働き口の全てを失い、シルバー人材センターの自転車管理の仕事から始めたのです。こうして働きながらこれまでに15作品の舞台を訪ねることができました。外に向かって宣言したことが“実現しなければいけない”的な力を生み出してくれたような気がします。

さて、未来の生き方については折に触れてこの「気まま随想」でも綴っていますが、逆算的に一番遠いところから目標を定めました。最終ゴールは2030年。ちょうど創価学会の創立100周年の年です。この年まで広宣流布（人々の幸せと世界平和につながる活動）に最大限に貢献し90歳でP P K（ピンピンコロリ）といきたい。

その10年前は2020年。東京五輪・パラリンピックの年。この時まだ79歳なのでボランティア通訳として大会会場か選手の通訳として頑張りたい。

その前年、今から3年後は78歳で金婚式の年にあたります。親しかった友人・知人を招待し、「お世話になった皆様に感謝を申し上げる集い」を催したい。そのために妻ともども健康管理を心がけ、しっかりと働き活動にも励み、最高に楽しく盛り上げていきたいものだと夢見ているところです。

もし一家の主が亡くなった場合、残された家族は葬儀社の手配から参列者を迎える準備等に追われ、故人を偲び悲しんでいる間もありません。亡くなった本人も“主人公”がない（話せない）ところに弔問を受けるよりも、まだ元気で動ける間に心ゆくまで語り合った方が、はるかに有意義ではないかと思うのです。この金婚式では皆様に感謝を伝えると共にそれまでの人生体験の交換を今から楽しみにしているところです。





会場には家の近くのホテルを予約し、“披露宴”では演奏会で腕を上げている子供や孫の演奏に自分も加わって楽しんでいく。参列の皆様には、お礼の言葉のほか、それまでにホームページで紹介してきた主な記事と写真を「清水武全集」として編み記念に差しあげる。その代わり、自分が亡くなった場合の葬儀への参列は遠慮をし、家族葬としてごく身内のみに留める。

こうした企画と集いを実際に持ったある識者は、著書の中で「それまで  
**新婚旅行で** の人生の中で最も楽しい納得のいく一日になった」と綴っています。私もそんな予感がしてくるのです。

金婚旅行は特派員として 10 年間駐在したパナマへ。お世話になった現地のメンバーにも感謝を伝え、当時若かったが今は自分と同じように高齢になっている方々も激励して差し上げたい。パナマ S G I (創価学会インタナショナル) 発展につながる寄金もしてきた。また子供たちが通っていたパナマ日本人学校では、創立 5 周年を記念して校歌の作詞と作曲を当時在住の日本人から公募しました。そのとき、作詞は約 40 作品の中から私の詞が選ばれた経過がありました。そんな思い出の学校の「今」も訪問してみたい。この機に旅を企画する背景には、駐在していた当時、池田先生からいただいた和歌に、生涯にわたる甚深な激励が含まれていることがあるからです。



パナマ運河の太平洋側

そしてその前年の 77 歳では喜寿を記念して NHK のど自慢に再度挑戦したいと思っています (2 年前、家のすぐ近くの昭島市民会館で行われた予選会で残念ながら落ちた経過がある)。曲はメキシコでお世話になった皆さんに贈る「ベサメムーチョ」。ポンチョとソングレロをまといスペイン語で――。

また世界文学紀行ではこれまで欧米のみでアジアの国の訪問はありませんでした。そこでこの数年は、取材の舞台となる作品はなくても、中国、韓国を初めとする近隣のアジアの国々を訪ねたいと考えています。そのために元気な限り働き続ける。

まさに“見果てぬ夢”を追いかけてきた「東京のドン・キホーテ」の生きざまの最終章ですが、こんな人生があってもよいのではないか――共鳴していただく方がいらっしゃれば嬉しい限りです。